

国引き 認定審査 現地審査報告書(公開版)

【日程】 2017(平成29)年8月4日～6日

【現地審査員】

菊地 俊夫(日本ジオパーク委員会)、竹之内 耕(日本ジオパークネットワーク)、坂之上 浩幸(日本ジオパークネットワーク)

【主な対応者】(職名等)

松浦 正敬会長(国引きジオパーク推進協議会会長・松江市長)、長岡 秀人(協議会副会長・出雲市長)、古瀬 誠(協議会副会長・松江商工会議所会頭)、小林 祥泰(会長代行・島根大学特任教授)、入月 俊明(学術研究部会長・島根大学教授)、住吉 裕(観光・広報部会長・松江観光協会美保関支部事務局長)、辻本 彰保全(教育部長・島根大学講師)、川島 英美子(委員・山陰万葉を歩く会会長)、阿部 國廣(委員・NPO 法人自然再生センター)、小泉 凡(委員・島根県立短期大学部教授)、小川 英二(委員・松江市公民館連合会会長)、召古 裕士(委員・NPO 法人日本エコビレッジ研究会代表)、木幡 育夫(委員・島根半島四十二浦巡り再発見研究会事務局長)、山田 和彦(委員・加賀まるごと博物館)、河野 美知(委員・神社ガールズ研究会代表)、中野 雅行(委員・加賀潜戸遊覧船)、小野 篤彦(委員・出雲市観光協会事務局長)、濱田 義治(委員・ウミネコ生態調査専門員)、高橋 一夫(委員・出雲市コミュニティセンター長会センター長)、平野 芳英(委員・荒神谷博物館副館長)、林 広樹(島根大学)、門脇 和也(ガイド・島根県自然観察指導員)、松原 慶子(ガイド・神社ガールズ研究会)、阿部 洋子(島根大学准教授)、江角 嘉宏(ガイド・出雲大社かたりべガイドの会会長)、藤井 満弘(部員・山陰中央新報社)、須田 郡司(巨石ハンター)、村岡、吉田 勝俊(ガイド・ミサキどっと come)、安田 大輔(ガイド・ミサキどっと come)、蒲生 千登(日御碕コミュニティセンターセンター長)、木内 吾平(JR西日本米子支社山陰地域振興本部長)、伊達 昌史(島根小学校校長)、広瀬 研也(松江城ガイド)、林 正久(島根大学名誉教授)、桑原 弘道(宍道湖魚類研究会代表)、山本 利明(出雲科学館館長)、藤村 八郎(出雲科学館副館長)

(協議会事務局)

井田 克己(事務局長・松江市政策部長)、石田 武(出雲市総合政策部長)、佐目 元昭(事務局次長・国引きジオパーク推進室課長)、三島 武司(出雲市政策企画課)、大野 和子、森江 和文、荒木 真一、野村 律夫(専門員、島根大学名誉教授)、三代 隆司、山田 将巳、佐伯 和幸、楫野 紋美、小田 千愛

【見学地点・行程】

- 1 日目：枕木山・華蔵寺ー大根島由志園ー大塚山ー松江市役所(ヒアリング等)
- 2 日目：松江城ー加賀の潜戸ー桂島ーマリンプラザしまねー美保神社ー青石畳通りー美保関灯台ー宍道湖グリーンパーク
- 3 日目：出雲大社ー日御碕展望台ー日御碕神社ー日御碕・日御碕灯台ー日御碕観光案内所ー出雲科学館ー荒神谷遺跡・荒神谷博物館

なお、今回の現地審査に際し、現地審査に行けなくなったJGC委員から以下の確認・調査項目が指摘されていた。

- ① ホームページが十分でない。（情報が十分でない）
- ② ジオパーク拠点が現在まだない。
- ③ 地域への浸透度は何でわかるか。
- ④ 「国引き」という名称が適切か。
- ⑤ コンセプト
- ⑥ 島根大学との関係
- ⑦ ガイドの養成
- ⑧ 教育活動
- ⑨ 体制
- ⑩ 雲南市や奥出雲が入っていないのはなぜか。
- ⑪ Bエリアが中心のストーリーとして展開されるべきでは？

本報告書では、関連する部分に上記指摘事項の番号を追記することとした。例（指摘－②）等

【現地審査のまとめ】

1) 国引きジオパーク構想の概要

国引きジオパーク構想は、島根県松江市、出雲市の2市からなる。

ジオパークの名称の「国引き」について、以下の二つの理由から妥当と判断される。

(1)「国引き」とは733年に編纂された出雲国風土記に登場する国引き神話に由来しており、出雲国風土記は当時の綿密な調査に基づき、地形や自然、動植物の分布などを記録した地誌であり、完本として現存する唯一の風土記である。古代から脈々と引き継がれてきたこの風土記に対し、地域の人々はいわば地域のアイデンティティとして強い愛着と誇りを持っている。「国引き」をジオパーク名に冠することは、地域住民がジオパークを親しみを持って迎え入れ、「国引き」を科学的に理解して地域振興に利用していく基本条件であることが理解できた。さらにスローガンの使われている「平成の出雲国風土記」には、ジオパークを活用して新しい時代の出雲国風土記を作り上げようという意思が汲み取れ、今後のジオパーク活動の進展が期待される。（指摘-③④⑤）

(2)ジオストーリーは、大陸の分裂から日本海の形成をへて現在の地形が完成するまでの過程を、出雲国風土記にある「国引き神話」と対比させながら提示するユニークなものである。島根半島の形成、出雲平野と松江平野の形成、連結汽水湖（宍道湖・中海）の形成、人の定着や集落の形成などの科学的なストーリーの中に、古代の人々の世界観を代表する「国引き神話」の逸話が織り込まれて、現代科学と古代の世界観の対比が興味を引く。このように、「国引き」はニセ科学を提示するものではなく、日本海拡大を関連付ける言葉として使用していることが明らかである。（指摘-③④⑤）

全体テーマである「大地が生んだ国引き神話と人々の交流」も、島根半島と海流、斐伊川な

どが作り上げた地形地質・自然の中で、出雲大社や荒神谷遺跡から出土した銅剣などに見られるように、古代から大陸との交流があり、独自の文化を育んできた地域であることの物語を紐解き、発信するという意味が込められているが、「国引き」がジオパーク名と重なっているので再検討を要請した。（指摘-④⑤）

2) ジオサイトと保全

ジオサイトは、「国引き」を科学的に物語るに必要な大陸時代・大陸分裂の時代・日本海拡大時代・日本列島の時代（古第三紀・新第三紀・第四紀）すべてに合計67ヶ所存在している。個々のジオサイトは、科学的価値、歴史・文化・生態との関係、保全の現状や関係者、教育や観光への利用価値、文献などがサイトカードとして記述され整理されている。エリア内には、大山隠岐国立公園（島根半島）、ラムサール条約登録湿地（宍道湖・中海）、ユネスコ無形文化財（佐陀神能）、国宝（出雲大社本殿・荒神谷遺跡・松江城天守閣・神魂神社本殿）、国特別天然記念物（大根島の溶岩隧道）をはじめ、ジオと関係づけられる豊富な自然や文化財が存在している。また、国引き神話を想起させる、国を引く杭にあたる大山と三瓶山、綱にあたる弓ヶ浜や菌の長浜、綱で引かれた島根半島の山塊、狭い国であったとされる宍道湖と中海を含む平野部などの地形が明瞭でわかりやすい。

地質的・地形的特徴は、先述したように大陸時代から日本列島形成にいたる変動と平野形成史を示すジオサイトがあることである。たとえば、河川や湖沼、深海や浅海といったさまざまな環境で堆積した地層や島根半島と南部山地の間に広がっていた内海への三瓶山の火山噴出物や「たたら製鉄」の「鉄穴（かんな）流し」による土砂流入、平野の拡大と宍道湖・中海の連結汽水湖の形成などを示す地形や地層である。これに加え、出雲大社を始めとする数々の神社と神話・伝承、そして出雲国風土記に表されるような独特の文化、さらに島根半島の地形が航海の目印となるとともに、季節風の天然の風除けとなることにより穏やかな平野部となり弥生時代から稲作が盛んであったこと、風待ちの港や良港が発達して大陸や国内との交易が盛んになっていったことなどを示すサイトが数多くある。国引きエリア全体のジオストーリーを考えた場合、「国引き」との強い関係をもつ日本海拡大までのストーリーだけでなく、平野形成史と関連付けた遺跡や暮らし、たとえば、散居村、築地松、たたら、米どころなど近世の素材をストーリーの中に取り込み、地域の魅力を伝える工夫がより必要である。（指摘-⑩⑪）

地域住民による保全活動は以下のように行われている。海岸部特有の漂着ゴミは地区住民のボランティアによる清掃活動や水産事業所での撤去作業などで対応している。観光客が拾ったシーグラス（ガラス製品の破片が円磨されたもの）を工芸品にして観光客に送り返す活動がある。協議会では、オーバーユース対策、ゴミ対策や意識啓発などの基本方針をエリア毎に立て、実効性の高い保全活動を進めていく計画がある。

3) 教育・研究活動

地域の小学校では斐伊川や島根半島を題材にした流水の働き、大地のつくりについて理科で野外事業を実施している。また、出雲科学館では河川の土砂運搬の実験やたたら製鉄についての学習、砂鉄の採取実習など、科学的実験を中心とした学校でできないカリキュラムを提供し、出雲市内の小中学校が活用している。一方、社会教育事業では、「まつえ市民大学」などの生涯学習の場でジオパークを題材とした講演が定着している。（指摘-⑧）

松江市・出雲市双方と包括協力協定を結ぶ島根大学では「島根大学くまびきジオパークプロ

ジェクトセンター」を設立し、ジオパークを活用して地域活性化を支援できる学術的な人材育成の取り組みが進んでいる。また、島根大学によるジオサイトや生態サイト、文化サイトの研究や評価のほか、ジオパークガイド養成講座や学校教育・生涯教育におけるジオパーク関係講座の講師を務めるなど強力な支援体制がある。（指摘－⑥⑧）

4) 管理組織・運営体制

協議会は松江市・出雲市の行政、大学や研究機関、博物館、交通機関、マスメディア、商工・観光協会、食品業界、電力会社、国土交通省河川事務所や地域活動団体などが委員となり、学術・研究部会、観光・広報部会、保全・教育部会の3部会で運営されている。特に松江商工会議所会頭（山陰合同銀行特別顧問）が副会長であることにより、産業界が活性化できる産・学・官・民・金の連携が期待できる。国立公園のエリアでもあることから環境省が参加している。

事務局は実務的な事務は松江市国引きジオパーク推進室で執るが、出雲市、島根大学でもそれぞれ担当者を置き、松江市4名、出雲市2名、島根大学5名で合同事務局体制としている。

運営に係る経費については、松江市・出雲市で負担金を折半している。ジオパークが各自治体の政策基本計画に組み込まれていることにより、将来的な資金も担保している。（指摘－⑥⑨）

拠点施設は、情報発信及び学習拠点として島根半島東側の「マリンプラザしまね」、情報発信拠点として西側の「日御碕観光案内所」、学習拠点として「出雲科学館」の3ヶ所を候補としている。現状ではまだ展示物等がパネル程度であり、拠点施設の目的に合わせたさまざまな工夫と展示が必要であるが、今後整備を進めていく計画がある。また、松江市内から島根半島への導線と情報発信のために、松江駅前の観光案内所も拠点施設としての機能を持たせていく予定である。（指摘①②）

5) 地域の持続可能な発展とジオツーリズム、ガイド養成

松江城や出雲大社、宍道湖・中海という古くからの観光地があるこの地域には、年間2000万人を越える観光客が訪れているが、一方では、特に島根半島で高齢化と人口減少が進んでいる。この島根半島地域に来訪者を導き、交流人口の拡大を促すことも地域がジオパークに取り組む意義の一つになっており、地域の団体やコミュニティ、自治会の中でもジオパークについての理解と活動が進みつつある。（指摘－③）

ジオガイドの養成は、従前よりガイド活動を実践している観光ガイドを中心に初級レベルのガイド養成講座を実施している。今回、大根島、松江城、加賀の潜戸（遊覧船）、美保関、出雲大社、日御碕でそれぞれの地域でガイド状況を見学したが、地質地形だけではなく、それに繋がる歴史・文化や暮らし、そしてこの地域の特色である神話や伝承まで盛り込んだ話がされ、ガイドとしての質は高いと感じられた。

今後、上級編の養成講座を設けて、認定ガイドを組織化していくとされ、ジオガイドやガイド団体の横の連携をとる為にも重要なことと評価される。（指摘－⑦）

ジオツアーの企画は、島根大学くまびきジオパークプロジェクトセンターの他に島根半島四十二浦巡り再発見研究会や鱒淵コミュニティーセンターなどが主催したツアーが3年間で28回開催され、魅力的なジオツアーが開発されつつある。（指摘－③⑥）

ジオパークの案内看板やサイト解説板などは、デザインはできているが認定前ということでまだ設置に至っていない。早急な設置が望まれるところであるが、一方、協議会からの補助を

受けて地域の団体や住民が主体となり、数種類の案内パンフレットやマップを作成し活用していることは高く評価できる。また、解説板の内容をわかりやすくするために、学校教員や児童・生徒、市民から解説板の内容を検討する仕組みをつくっていく必要がある。（指摘②③）

地域の特産品・商品としては、すでに大根島の雲州人参（朝鮮人参）が生産されているほか、出雲国風土記の時代から特産とされていた薬草を使用したクッキーの開発・販売されている。桂島のシーグラスを使用した陶器の体験製作、美保関のあご（とびうお）すくいなどの体験型商品の開発も進められている。

6) 国際対応

松江城や出雲大社などでは、すでに外国語表記の案内板や二次元バーコードを利用したWeb解説システムが設置されているが、ジオサイトにある既存看板は未対応であった。新設される解説板等は日本語・英語の二カ国語表記で作成する予定となっている。

また、松江市・出雲市の国際交流員（計7カ国）もジオガイドとしての知識を深めて来訪外国人への対応の強化をはかるとしている。環境省の国立公園満喫プロジェクトにも関連し、インバウンド対策が期待される。

7) 防災・安全

申請地域で想定される自然災害は、洪水、土砂災害、地震、津波とされている。中でも洪水は8世紀の古文書にも記録されており、斐伊川の東流化による水害の増加など、水とともに生きるこの地域では数多くの水害に見舞われてきた。協議会では、ジオガイド養成講座やジオツアー時にこれらの災害とその対策について伝え、防災学習に力を入れるとともに、松江市・出雲市の地域防災計画の中にジオパークとの関わりを位置づけて連携を図っていくこととしている。

また、ガイドマニュアルに安全管理項目を明記し、ジオツアー時の安全管理体制を強化していくとしている。

8) まとめ

大陸の分裂から日本海の形成をへて現在の地形が完成するまでの科学的ストーリーを、出雲国風土記にある「国引き神話」と対比させながら提示し、古代の世界観と現代科学の解釈の相違点や類似点に気づきながら、大地を学ぶことができる、日本の他に例をみないジオパーク構想である。ジオストーリーを理解するためのジオサイトや生態サイトや文化サイトが豊富にあり、それらの質も高い。松江市・出雲市の総合計画にジオパークが記載され、行政と島根大学からなる事務局が設置され機能している。さらに両市長はジオパークを地域振興の柱としていくことを明言しており、経済界、教育界、地域などからのジオパークに対する期待が高い。ジオパークガイドになるべく地域ガイド団体がガイド養成講座を受けてガイド実績を積んでおり、ガイド内容は及第点と判断される。地域では、コミュニティセンターや地域グループが中心となって、ジオパーク講座の受講やリーフレットの出版、サイトの清掃活動などが行われており、地域住民が調査してきた地域資源の成果がジオパークに活用されるなど、地域住民によるボトムアップ活動が生まれてきている。（指摘③⑦⑨）

一方、情報提供施設や解説板、案内板の未整備があり、情報提供の仕方、観光客動線の検討が一部に必要であること、ジオパークの地域住民への浸透が地域によって温度差があること、ジオパークエリアの地域資源をもっと利用したジオストーリーの構築が求められることなどの課題がある。

(指摘－①②③)

しかし、ジオパークの良質な素材とユニークな伝え方があること、運営体制、ガイド、地域住民の活動が機能しつつあること、ジオパーク名に地域の誇りと愛着である「国引き」を冠したことで今後の地域住民によるジオパーク活動の拡大と活性化が期待できることなどから、上述の課題を順次解決していく力量があると判断される。(指摘－③④)

よって、国引きジオパーク構想を日本ジオパークに認定するものである。